対人援助学研究 2017，Vol. 5　34-38.

対人援助学特集

補論　対人援助学における人称性という課題

――武藤論文を受けて――

森　岡　正　芳
（立命館大学総合心理学部）

Commentary
First and Second Person Issues in the Science for Human Services:
On the article of Muto（2017）

MORIOKA Masayoshi
（College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University）

1. はじめに

人間科学の実践領域が多様に広がってきた。その基盤を作る学も，実践現場の対象と求めの多様性に応じて，方法論も多様になるのは自然な成り行きである。しかし一方で，人が人を対象としてとらえる場面そのものが，複雑かつ関係性の要因がからんでくるがゆえに，いったんそれらの要因をカットし，事象をシンプルにとらえ仮説を立ててみる。その仮説を再現可能な手続きに従って検証を行う。このような実験精神は対人援助場面であろうと，欠かせない。他方で，日常接する複雑な事象を，推論によらず一挙に感得するしなやかな精神，パスカルが繊細の精神と呼んだものを援助場面では培いたい。

武藤はそのどちらの精神も持つ稀有の心理学者の一人である。武藤（2017）では，二人称科学の成立という困難な課題に果敢に取り組み，対人援助学の基盤を画する発想に満ちた周到な論を展開されている。武藤の二人称科学としての行動分析学の提示は，新鮮な知見にあふれている。カウンセリング場面をナラティヴアプローチの立場から基礎づけてきた筆者からすると，この論に抗して討論すべきことは何も持ち合わせていない。あえていえば，武藤（2017）で扱われていない文献を紹介し，二人称記述に関わる対人援助学の基盤について論点を補足し，その展開可能性を探るということで，筆者に求められた役割を果たしたい。

2. なぜ人称性の科学が必要なのか

2－1. 自然科学における二人称記述

科学は三人称の記述が基本である。「普遍性，客観性，論理性，実証性」を維持し達成することが目標である。仮説検証の手続きに従って追試すれば，同一の結果が出る再現性を根拠に，誰にも通用する一般的言明とセオリーを立てることが科学の目標となる。「普遍性，客観性，論理性，実証性」の中核に位置するのは，物質，物体を対象とする自然科学である。人も，物としての性質をもつ限りでは，科学の対象となるが，心をもった人間は感覚，感情体験の個別的差異が大きく，要因が複雑すぎ，厳密科学の対象になりにくい。そこで浮上するのが，二人称科学である。

二人称科学は，人間科学の展開とその応用領域として対人援助の実践の多様化において必然であるという前に，すでに自然科学の分野で議論されてきた。二人称の記述は三人称のそれと比べて，意味内容が個別具体的である。松野（2005）によると「二人称の記述の特徴は，記述の及ぶ相手が誰，何ものであるかを具体的に明示することができるとする状況を

容認するところにある」。対象が物質，物体であっても，三人称記述にない特徴を，自然科学においても活かすことができる。

科学的観測において観測者の側の要因と，観測が行われる文脈を無視できない場合がある。「互いに関係しあう個物がその個別具体性を獲得するのは，一方が他方を特定し，その特定によって，特定したほうが拘束を受ける，その受け方においてである。しかも，その互いの間での関係の及ぼし合いには際限がない。拘束を受けた個物が周りの個物を新たに拘束するという連鎖が絶えることなく継起する。これを記述において実行するのが二人称の記述である。」（松野 2005）。このように観測対象と観測者は相互に影響関係にある。二人称記述は関係における対象と観察者の相互可変性を含めた試みである。

2－2. 主観の成立基盤

人間科学では以上の動向は必然的なものである。認知科学の最近の展開として，主観性の研究が浮き彫りになってきている。その背景には，脳神経科学の目覚ましい発展がある。武藤も引用する人工知能の研究領域で一人称研究が話題になっている（諏訪・堀 2015）。厳密科学を基盤とするロボット工学が，一人称の研究を主張するのは一見意外である。

1980 年代より，知の普遍性が疑問に付され，人の知がどのように形成されるかに関心がもたれ，知の状況依存性と個別具体状況における身体知に，関心が集まるようになった。認知科学においてこそ主観の成立基盤が問われる。認知科学における意識研究は心理学よりも現象学に直結し，この課題に取り組む。そこから立ち上がったのが，意識研究における一人称問題，二人称問題であった（Varela & Shear 1999, Thompson 2001, Depraz 2014）。また自己の根拠を問うことから，認知科学と現象学は原始仏教の探求へと向かい，そこに親和性を発見しだしたのは，驚くべきことである（Varela, Thompson & Rosch 1991）。マインドフルネスというセラピーの一つの形で，新たに展開している南伝仏教由来の自己制御法に，ACT が実践的につながることも，思想史的な側面との関連を抜きには語れないだろう。

2－3. 実践上のモメント

対人援助の学においては，人称性の科学の導入に実践上のモメントがある。強い現場的要請がある。対人援助では，心を持った人間が学の対象である。面接者（対人援助の専門家）が，手本となる援助理論に即して，中立的な立場からインタビューを試みたとしても，対象者は名前を持った面接者その人自身に反応し，応答を返している。互いにその人自身と交流関係にあることを抜きに，援助場面の学は成り立たない。

語る・聞くという行為を基盤とする臨床科学，人間科学は，無人称あるいは三人称の客観的記述ではなく，人間の行為を理解し，相互関係の中で記述していくことに親和性が高い。これを二人称の科学と名づけることができよう。対象者の個別具体性に注目することがその特徴であり，研究者の側と対象者との影響関係は相互的であり，相互に拘束を受ける。この科学が到達するところは，普遍知，一般知ではなく，あくまで，ローカルな知である。実践の場での活用にこの科学の特徴が発揮できる。

3. 人称性とは

3－1. 人称性の両義性

会話場面での通念として，話者が一人称，相手が二人称，話者と相手以外に存在するものを三人称ととらえられることが多い。人称（person）は本来，演劇で役者のつける仮面あるいは役割の意味であり，人称というより，役と呼ぶべきものであった。I と呼ばれる人も，立場を変えれば You にも，He/She にもなる。いいかえると一度 I が決まれば，それにもとづいて You や He/She が決まる。人称はこのような記号的な意味合いが基盤にある。人称性は場面と文脈によって決定される可変的なものである。武藤はもちろん，人称性という概念は単なるレトリックではないと断り，科学における個別性の回復においておさえるべき論点を慎重に扱いつつ，この概念を導入している。

対人援助という場面を基礎づけるときの人称性は，記号的変換の次元とは異なり，私と相手は交換不能な存在としての重みをもつ。人称性の文脈にお

ける可変性の次元と自己他者交換不能性の次元は異なるもので，混同を避けねばならないが，この両義性は対人援助の場でこそつきまとうものである。自己は他者との関係でたえず揺らぎ，交錯し合うのが臨床の場である。一方で臨床の場では，目前のこの人が抱える現実の接近不可能性にたじろぐことも稀ではない。

「他者自身の体験は，私には絶対に体験できない底知れない物自体，得体の知れない現実である。この現実を名指す標識として，「あなた」という人称代名詞や固有名で表される人格が措定される。「あなた」が本当のところ何者なのか，何を考えているのか知ることはできないのだが，そのようなものとして，人称代名詞や固有名は使われる」（村上2008）。

村上によると，あなたという言葉を使うことで，他者の得体のしれぬ部分はふたがされ，現実が隠蔽されるが，それによって日常のコミュニケーションは可能となるともいえる。

3－2. 呼びかけ応答する

人称は関係性の中でとらえられる。私とあなたという関係性が前提である。私があなたにどのような応答をするかを外すことはできない（山本2006）。二人称は「あなた！」「＊＊さん！」と私が相手に呼びかけるときに動き出す私とあなたの関係が基盤にある。あなたに呼びかけるときは私もあなたに向き合いあなたの側に歩み出しているから，その瞬時に元の私とはちがっている。私など置いておいて，相手の世界に入り込んでいくのが対人援助者たちの大切なムーヴでもある。他者とともにいるとき，自己をふりかえる感覚はいったん退いている。再起的な反省を起こす前に，私はあなたに応答してしまっている。対人援助や臨床での記述は，この部分が抜けてしまっていることが往々にしてある。

武藤（2017）の提唱する「動的な過程を扱いながら，他者を再起的に記述していく」二人称科学は，まさに現場でのムーヴに沿いつつ，二人称の記述そこに生じる矛盾葛藤を回避することなく，臨床を科学的に根拠づける方法論の探求と評価したい。

4. 体験へのアプローチ

4－1. 体験の前人称性

対人援助場面にて人称性科学が成立するには，人称を問う以前，すなわち前人称の状態について把握しておく必要があろう。人と人が相対するとき，人称性から切り離された他者の「もやもやしたもの」を，互いに表出し合っている。主観のあり方が相互に影響を与えているような場に対人援助者は身をあずけている。体験の中に含まれる相互の影響関係には，意識化言語化されにくいもやもやした部分が残る。いわば，体験の前人称性という側面である。

もし，体験のこの側面が十分に意識されているとき，それを自己の体験として十分に生かす道が開けるともいえる。二人称記述が体験を深めることにつながる道を探ることは，実践上の要請でもある。武藤の概説を見ると，ACT はまさにその有力な方法の一つとなりうるだろう。

ACTは体験的アプローチを旨とする。体験的とは，「自らが，環境に直接的あるいは疑似的にさらされたときに生じる新たな変化を十分に体感するという意味」（武藤 2017）である。クライエントが言語的に自らを追い込む状態を緩めることが，臨床においてまず求められる。ACT のアプローチは体感的であり，脱言語的である。その水準での交流を現場でキャッチしていること。これは人称性が分化する以前を支えるもので，前･人称性に焦点づけるアプローチと呼ぶべきであろう。

臨床の対象は必ずしも自明な実体ではない。前・人称的水準で課題となってくる対象が，兆しのように援助者の意識に出現してくるような事象を扱うことも多い。それは，注意深い技法によってはじめてはっきり形をとるものであろう。

4－2. 事実と体験

人への研究と実践アプローチの基本はまず事実の収集である。個人の体験の意味や解釈を優先する前に，まず事実をという態度が主張される。これは科学研究においてもっとも大切な態度であるし，対人援助，臨床実践においても不可欠である。事実の精密な収集とそれにもとづく的確なアセスメントが優

先されるべきなのはいうまでもない。

たとえば医療現場では，患者の苦痛や不安の訴えが前面に出ているが，ここで医療専門職は冷静に事実を確認することを優先するであろう。ところが患者の言葉には，事実なのか体験の意味を述べているのか区別がつかないことが多い。そして援助者がそれを消極的に聞くか，積極的に耳を傾けるかによって，事実の体験の仕方は変わるのである。

人の体験そのものは，事実の総和ではない。また事実が集積されるだけでは，それらが何を表すかはわからない。それを再現表象化し，共有できる形にすることが必要なのである（Bruner1990）。体験を伝える人の現実は，情動を伴うものである。とくに病気という出来事は，出来事として際立ったものである。不安と心配，怖れがつきまとう出来事として個人の体験世界に突出する。それまでの生活と人生の変更を強いる力が病気という出来事にはある。

体験の記述に関して，当事者視点に基づく必要から人称性の問題が浮かび上がってきたが，一方，当事者こそそれを体験している唯一の人であり，その内観に沿って記述されるべきであるとする一人称の特権は必ずしも妥当ではない。ある個人の一人称的内観報告によってのみ体験の質が保持されているとはかぎらない。個人の体験は，他者（対人援助者）によって語り聴きとられ，生きた体験（lived experience）として再現されることによって，体験の質を深めていく。生きた経験に接することと，内省の作業（reflecting act）の動的なプロセスに治療的意味がある。

5. 意味の運動の場

5－1. 場面を構成する中での了解

ACT の三項随伴性という分析枠は武藤（2016）の提示によって，柔軟性に富み実践的であることがわかる。何を弁別刺激，行動，結果と記述するかは，「その人が，どのような立場で，どのような価値観を持ち，その現象（多くの場合，何かしらの「問題性」を抱えている状況）に関与しているかによって，記述される内容が必然的に異なってくる」。

臨床における二人称の記述とは，アセスメントのことに他ならない。そして臨床の記述のために，援助者はまず相手とよく会話をしなければならない。対人援助者の側が，来談者と語り聴き，いったんはこちらの地図を離れて，その体験世界に入り，聴きとられた現実に沿って，来談者にできるだけ具体的な分析枠を共同的に構成することが援助的である。

望月・武藤（2016）による一事例の実験デザインという方法論は，二人称記述が科学的方法として成り立つことの提唱であろう。援助者として＜あなた＞と（あなたの）＜クライエント＞との関係，そして＜クライエント＞と＜クライエントが生活している時空間＞との関係をきめ細かく記述し，援助者としてのあなたの援助の有効性を実証的に検討することが可能である。ここでいう科学と実証性はあくまで，援助者としての＜あなた＞と（あなたの）＜クライエント＞との関係における科学である。科学的方法の根拠である再現性は，臨床や対人援助の場合，場面限定的である。この限界は臨床の科学としては，むしろ妥当な提示である。精神分析的心理療法の認識枠組みにおいても同様で，記述された生活状況は臨床場面の中で，患者の生活史的意味において理解される。Lorenzer（1974）は，これを「場面的了解」と名づけた。臨床科学の基盤は限定された場面における相互交流による了解と記述である。

武藤が二人称科学において強調する姿勢，相手の話を聞きつつ，対人援助場面を構成していくことこそ，対人援助やサイコセラピーの共通基盤であると考えられる。

5－2. 可能性の空間を作る

対人援助的な会話は，意味の自由な動きをできる限り保証する場を設定するなかで行われるものである。Anderson（1997）はこの場を，可能性空間と名づけた。セラピストはクライエントとの会話を通じて，この空間を作り広げていく。

武藤（2013）は，ACT のセラピストはクライエントに対して「リアリティのあるフィクション」を提供することが欠かせないと述べる。セラピストとクライエント双方のリアリティは，ずれることもある。何にリアルを感じるかを，その場でそのつど，クライエントに聞きつつ進めるのがセラピーにおい

て必要だ。ここで，ACT は二人称の科学に基礎づけられねばならないと武藤は述べる。セラピー場面は「クライエント専用のフィクション空間」として会話のやり取りを通じて構成されるものである。

サイコセラピーでは，メタファやパラドクスを通じて疑似体験を生み出す。そのためには，クライエントの世界にまずは入り，よく聞き，その求めに応じて，場面を作っていく。これを「テーラーメイド化（つまり，二人称的にかかわる）」と武藤（2017）は述べている。セラピストは相手に導かれながら，その場でヴァーチャルに，クライエントの体験世界を積極的に構成していくのである。他者（クライエント）との応答関係の中で，二人の間に固有の空間が生まれる。クライエントに問いかけ，セラピストも応答しながら，その場にクライエントの生きた体験の空間を創造する。

これは，即興劇のための舞台を作るようなものである。サイコセラピーで起きていることを説明するには，演劇ドラマのメタファがぴったりくる。この場の効果は，リアルなフィクションを構成できるかどうかにかかっている。いわば治療的な「イリュージョン」を与えるのは立場の違いはあっても，サイコセラピーの共通項である（神田橋 1990）。

6. むすびに

対人援助の場はゆとりを保ちにくい。ともすれば，緊急の課題と解決に躍起になることが多い。それでも，息長く相手の世界に身を寄せていきたいものだ。それまで心を閉ざした子どもが，こちらを認め招いてくれる時がある。心を見せてくれる瞬間である。相互交流による二人称の影響関係は，可視的に示されるものばかりではない。身体は動いていなくとも，心は動いているということがある。心を自由に使う空間をつくる。その基盤は遊びや空想の働きによる。さて，この空間は相互行為による可変的なものだから，誰と誰が関わるかによってその質は異なる。これは，二人称科学のもつ複雑な問題点であるが，武藤論文はきわめて挑戦的な課題を提示してくれている。さらなる議論を積み上げていきたい。

引用文献

Anderson, H. (1997). *Conversation, Language, and Possibilities.* New York: Basic Books. （野村直樹・青木義子・吉川悟（訳）(2001). 会話・言語・そして可能性.　金剛出版）

Bruner, J. S. (1990). *Acts of Meaning.*　Cambridge, MA: Harvard University Press.（岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子（訳）(1999).　意味の復権.　ミネルヴァ書房）

Depraz, N. (Eds.)(2014). *Premiére, Deuxiéme, Troisiéme Personne.* Bucarest, Roumania: Zeta Books.

Depraz, N., Varela, F. &Vermersch, P. (2002). *On Becoming Aware: A Pragmatics of experiencing.* Amsterdam: John Benjamins.

神田橋條治（1990).　精神療法面接のコツ.　岩崎学術出版社

Lorenzer, A. (1974). *Die Wahrheit der Psychoanalytishen Erkenntnis.* Frankfurt am Mein: Suhrkamp Verlag.（河田晃（訳）(1985).　精神分析の認識論.　誠信書房）

松野孝一郎（2005). 分子が眺める生命の起源.　現代思想, *33-8*, 126-137.

村上靖彦（2008). 自閉症の現象学. 勁草書房

武藤崇（2013). 臨床行動分析と ACT：「二人称」の科学とその実際．臨床心理学, *13-2*, 202-205.

武藤崇（2017). 対人援助学の方法論としての「二人称」の科学.　対人援助学研究（2017）

望月昭・武藤崇（2016). 応用行動分析から対人援助学へ：その軌跡をめぐって. 晃洋書房.

諏訪正樹・堀浩一（編）人工知能学会（監修）(2015). 一人称研究のすすめ：知能研究の新し潮流.　近代科学社.

Thompson, E. (Eds.)(2001). *Between Ourselves: Second Person Issues in the Study of Consciousness.* Exter, UK: Imprint Academic.

Varela, F., &ShearJ. (Eds.)(1999). *The view from within: First-person approaches to the study of consciousness.* Exter, UK: Imprint Academic.

Varela, F., Thompson, E., &Rosch, E. (1991). *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience.* Cambridge, MA:MIT Press.（田中靖夫（訳）(2001). 身体化された心－仏教思想からのエナクティヴ・アプローチ. 工作舎）

山本史華（2006). 無私と人称 - 二人称生成の倫理へ. 東北大学出版会

（2016. 11. 18　受理）
（ホームページ掲載　2017 年 5 月）